

鳥取西高近畿同窓会報

第 17 号

2024 年 4 月 1 日発行

発行 : 鳥取西高近畿同窓会
発行責任者 : 窪田邦倫 (西高 45 年)
編集責任者 : 山内紀嗣 (西高 43 年)



さらなる発展を目指して

設立六十周年に思う

鳥取西高近畿同窓会
会長 窪田 邦倫

(西高四五年)



近畿同窓会は今年、六〇周年を迎えました。設立は一九六四年(昭和三十九年)。この年は、東京オリンピック

会報は皆様から寄せられたお話を中心に編集しました。ご一読いただきながら、一足早い交流の輪を感じて下さい。

第五八回同窓会報告

昨年、六月一八日(日)、第五八回総会を大阪キャッスルホテルで、母校より岡岡校長(五九年)、同窓会より小谷会長

の開催や東海道新幹線の開通など、国民が一つになり、みんなが歓声を上げた時代です。「幸せなら手をたたこう」がヒットし、みんなが手をたたきながら幸せをともにしていた、そんな実感があります。何か前途に明るい光を見ていたような時代でした。

同窓会にとって、人と人の繋がりは大きな力であり、宝物です。皆様との繋がりで『還暦』となった近畿同窓会。干支が一巡して誕生の年に還る節目の年です。改めて設立当時を思い出し、世代を超えて会員が集い、時間を共有し、仲間との繋がりが、社会との繋がりで「幸福感」を得られる会を、皆様とともに目指そうと思います。

今年の干支は「辰(龍)」。しかも「甲辰(きのえたつ)」にあたり、物事の始まりを意味するとも言われます。近畿同窓会設立の年も「甲辰」でした。巡り合わせでしょうか。本会にとって新たな挑戦の年、飛躍の年と感じました。今回の



一中高女西高 第58回定例総会
鳥取西高等学校近畿同窓会
令和5年6月18日(日) 於大阪キャッスルホテル

第 59 回鳥取西高近畿同窓会ご案内

日時 : 令和 6 年 6 月 16 日 (日) 11:00 ~ 14:30
(受付は 10:30 より) ①総 会 : 11:00
②懇親会 : 12:00 ~ 14:30

会 場 : 大阪キャッスルホテル 6 階

大阪市中央区天満橋京町 1-1 TEL 06-6942-2401

参加費 : ￥9,000 <当日会場にご持参ください>

(29 歳以下の方は 6,000 円、親子・夫婦会員は一人 1,000 円減額します)

長寿(80 歳以上)の方のお祝いは当日出席された 38 年ご卒業の方、37 年以前でお祝いがまだの方が対象となります

(四十七年)、鳥取県より高務関西本部長(六一年)をお迎えし、総勢四四名で盛大に開催しました。

総会には高女二四年卒一名(九三歳)、西高二五年卒二名(九二歳)の方に元気なお顔を見せていただいたほか、平成九年卒の方が三名出席され、世代を越えて大いに親睦を深めあうことが出来ました。

懇親会では余興として、日本各地の民謡大会で優秀な成績を収められている三三年卒の遠藤準二さんが自慢の喉を披露され、その唄声に会場は大いに盛り上がりました。

(西高四三年 事務局長 村江信幸)

信州 よたよた 青春旅行

中原悠司（西高三四年）

令和四年と五年、西高の同級生五人で信州旅行を楽しんできました。皆八〇歳を越したので何かしら膝とか腰とか支障を抱えており、杖ついて五〇歩歩いては腰かける人も。これが最後になるかもという思いを抱えての旅でした。

令和五年 前年は三泊四日の旅でしたが、各々の都合で十一月中旬に二泊三日となりました。カーナビに振り回されながら諏訪大社春社・秋社、湯ノ丸高原「アトリエ・ド・フロマージュ」チーズフォンデュとビザ、勝沼ブドウの丘、奥多摩の玉堂美術館、澤乃井園と廻り、青梅から新横浜に行き、帰阪。

山荘での夕食会、石和温泉での居酒屋談議に花が咲きました。特に同級生の消息、来し方など故郷鳥取を離れて知らない情報が入るよう元気で過ごそうねとの約束を交わしました。私は前日に別所温泉での大学



ワンゲルOB会に出席したこともあり、帰りに着いた時の残金は一二〇〇円でした

令和四年 梅雨の合間を縫って六月中旬Y君の山荘（長野県青木村 標高九〇〇㍎にあるロッジ）を起点に車で各地をめぐるしました。

〔美術館〕上田市立美術館「アルフォンス・ミュシャ 煌めきの女神たち」展、軽井沢千住博美術館、長野県立美術館「東山魁夷展」〔温泉〕室賀温泉「ささらの湯」、星野温泉「トンボの湯」、小布施温泉「あけびの湯」〔旧跡等〕白糸の滝（軽井沢）、善光寺御開帳（長野市）、奈良井宿（塩尻市）、馬籠宿（中津川市）〔信州蕎麦〕よろず屋（上田市）、善光寺南大門そばの店、くるま屋（木曽福島…絶品）

一日目の夕刻は経験したことのない豪雨、四日目の午後小雨以外は晴天でまさに充実旅行でした。

楽しみに

していたのに

瀧山（河村）恵美子（西高四六年）

コロナのパンデミックが始まったところから、出口のないトンネルに迷い込んでいた。出口のないのは洞穴か洞窟であるがとにかくやり場のない不安感にさいなまれていた。

その時に母校からの同窓会便りである。飲み会やランチ会を控えていたので、トンネルの風穴を開けてくれることを期待して



申し込みのしがきを投かんした。他にも地域のイベントなどにも申し込んだ。これでトンネルから抜け出せると楽しみにしていた。

しかし、喜劇は突然起こった。悲劇ではなく第二部の「楽しい？入院生活」があり、喜劇となった。

令和五年六月六日はいつもの普通の通勤のはずであった。通勤経路に通り抜け出来る神社があり、ほんの少しだけ時短になるので神社の境内を抜けて通勤していた。

神社の鳥居をくぐった辺りからカラスが威嚇をして来た。早く通り抜けようと小走りになった時、後頭部にサッカー選手のベッカムが蹴ったシュートよりも強烈な衝撃を受けた。神社の中のカラスが体当たりをしてきたのである。そのはずみで、転倒。ボスカラスの「グワーツ」という号令で神社の中のカラスの総攻撃が始まった。その神社には防犯カメラの設置がなくその時の映像が無いのが残念であった。あれば、当日のローカルニュースで流されたであろうことに間違いはない。仕留めた獲物の止めを刺すが如く、背中を多くのカラスで攻撃してきた。

「生きた心地がない」とはこの様な時に使うものだと思えながら、攻撃の収まるのを待って、裏の道路へと逃げ出した。転倒

した時から、顔は血が出ていることや右手首を折ったことは痛みで判っていた。

地域の行事で出かける会社の同僚が「どうしたの？」と声をかけてくれたがとにかく会社のタイムカードをと思い、その神社からすぐにそばの会社へと急いだ。

事務所に入ると皆が「どうしたの？」と聞いてくれたが、カラスに襲われたとしか言わないで、救急箱を持って来てくれた同僚とトイレで顔見てビックリ。ほら、顔全体から血が出ていて、鼻の下は裂けている状態であった。

「病院に行けば！」とのありがたい言葉を背に受けて、普段から仕事で懇意にしている近隣の内科に駆け込んだ。

ドクターは顔を見るなり「交通事故？」と確認し、「交通事故ではないM神社でカラスに襲われた」と伝えると外来をストップして対応に当たってくれた。

「顔の血だらけを何とかしてほしい」と伝えたが、「下手に触ると傷跡が残る、手首は折れているから」と、「今日中に入院できる病院を探します」と近隣の病院の医療連携室へ紹介状の一斉ファックスを流してくれた。

西九条のG病院が受け入れ可能とのこととで、救急車はもつと重傷な人に残しておいて、タクシードかい受診した。

結果、楽しい？入院生活となった次第です。

ああ、青春の夏・・・

西尾好美（西高五〇年）

私が鳥取西高を卒業（昭和五〇年）して地元鳥取大学に進学し、そこに無かったサイクリング部を創部したのですが、それゆえ、大学時代は自転車三昧の学生時代を送りました。

その大学時代で一番の、いや一生の想い出になるのは、一九七七年の夏でした。

夏休みに入った初日（七月九日）に、自転車を分解して軽自動車で出発。敦賀からフェリーで小樽に。そして西高時代の同級生二人が在学していた北海道大学の学生寮に転がり込んで、そこから自転車で一路、北の端、宗谷岬を目指して走り始めました。寄り道として、利尻・礼文島にも渡りました。第一目的の最北端宗谷岬を制した後は、海岸線を南東に進んで、知床から納沙布岬。南に回り込んで襟裳岬・苦小牧を経て札幌市（北大）に帰り着きました。

その後、私の軽自動車に北大の友人一人を乗せて、東北地方縦断コースで南下し、



長野駅で彼を降ろし、私は鳥取大学サイクリング部の信州での合宿（七日間）に参加。

合宿解散後、また北海道までＵターンし、走り残した道央道南を走破した後、小樽から舞鶴はフェリーに乗船し、帰宅したのは八月三十一日の夜で、翌日から大学の授業を受けていました。

その延べ五四日間の大旅行で自慢すべきは、鳥取市内の自宅を出てから、飲食代は元より、何回かの宿泊代（大半はテント泊）・フェリー代・ガソリン代など、全ての費用合計を一〇万円で済ませた事。貧乏旅行の極みです。

それで生まれた逸話として、北海道を自転車で走っている途中で、道端に落ちていたトマトジュースの未開封の缶を拾ったものの、当時私はトマトが大嫌いだったので、そのままフロントバックの中に入れて走り続けていました。ところが、帰路の小樽発のフェリーは当時三〇時間かかり、船内食堂でカレーの一杯（たしか五〇〇円）を食べるお金も残っていなかったため、二日目には、仕方なく鼻をつまんで、そのトマトジュースを飲んで飢えをしのいだのです。そしてその一件から、トマトジュースも生のトマトも食えるようになったと言う顛末です。

ちなみに途中でガソリンを給油したので、帰宅時の財布の中身は五〇円でした。あれから四七年。当時から乗っていた自転車を含め、製造後五一・四八・四四・四三年を経たビンテージマシンをはじめ、六台の自転車を、とっかえひっかえして、我家（滋賀県のＪＲ野洲駅前）から琵琶湖畔を経由する約三四キロをホームコースとし

て、週に二、三回、「日に日に変わりゆく草木の姿を楽しみながら」走っています。この自然に恵まれたコースを、最低あと一〇年、できればあと二〇年、自分の足で走り続ける事ができるよう……。それが今の私の夢・目標・生き甲斐です。

高校野球を観戦して

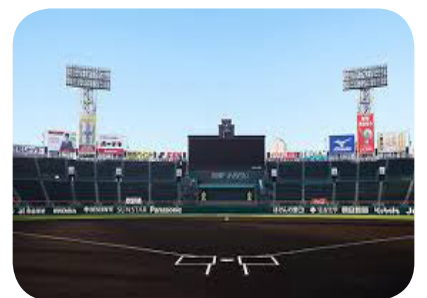
思うこと

尾崎充典（西高五三年）

昨年十一月、鳥取へ帰省する途中、鳥取西高創立一五〇周年記念として、鳥取西高と東洋大学姫路高校の試合が見られると友人に聞き、ヤマタスポーツパーク野球場に立ち寄って観戦しました。

東洋大学姫路との交流戦は、昭和五〇年当時、監督であつた井上博氏と東洋大学姫路の梅谷馨氏がともに社会人野球時代に交流があつたことがきっかけで練習試合が始まったようです。

鳥西野球部の試合は、秋季大会も倉吉市営球場でたまたま観戦し、中国大会に出場した米子松陰と接戦だったので期待していました。結果は三回まで一対〇で鳥西がリードしていたものの、やはり力の差は歴然で徐々に左右四投手が打ち込まれ、一対九で敗れました。東洋大学姫路といえど、全国優勝している強豪校であり、新たに大阪履正社高校を一新回甲子園に導いたOB岡田龍生氏が監督に就任されたばかりで、二



度目の全国制覇を目指しているチームです。そんな学校と試合ができるとは何と素晴らしいことか。よく鳥取まで来てくれたと感謝し

たい気持ちでした。

そして、ふと思いついたことは、お互いの選手は一所懸命プレーしているのに、もっと本気で応援しないといけないのではなかったか？。そうすればスコアも違った結果になっていたのではないだろうか？

出来ることならば可能な限り応援席を満員にして声を張り上げての応援、手が痛くなるくらいの拍手を送りたかった。もちろんナイスプレーには相手チームにも。

もしこれが甲子園球場だったら、間違いなくアルプススタンドに皆が集まっていたことでしょう。それならば練習試合でも、県予選でも圧倒的な応援で相手にプレッシャーをかけることは出来たのではないだろうか？

高校野球も私立強豪校と公立高校との間には近年、はつきりと力の差が感じられるようになってきた事は否めません。昔から「文武併進」の精神を受け継ぎ、高い志を持って、礼儀正しくて、頭脳プレーで緻密な野球を目指しているエンジ色のアンダーシャツを身に纏った鳥取西高の野球がたまに

県大会を勝ち抜いてくれるのを待つのではなく、我々が懸命に声援を送り続けることによって勝負ができる雰囲気を作っていただきたいのです。圧倒的な応援を見せつけることで相手チームより優位に立って試合が出来るのなら、決して難しいことではないでしょう。

そうすることで、本当に勝負強くなってくれることを心から期待しています。

さあ、球場に行つて鳥西野球部を応援しよう。

会員の近況



(昨年の返信はがき通信欄より)

浜本英子(西高二四年) 元気にしております。九〇歳を越えました。

太中繁夫(西高二六年) 九二歳を迎えますが、終戦直後の西高生活が懐かしく思い出されます。

多田(白井)梢(西高三一年) 昭和五一年以来、芦屋市内で小さな内科医院を続けています。七〇歳より始めた囲碁とハープ演奏が老境の愉しみです。

松本七子(西高三一年) 雪の降る日に馬場町の家まで歩いて帰って親ガニの味噌汁の昼食は美味しかったです。

谷口(村中)頌世(西高三二年) 毎朝テレビ体操を十分間継続しています。

遠藤準二(西高三三年) 元気に公益財団法人の事務をさせていただいており、神戸から加古川まで通っています。働かせていただくのが健康の源です。

草野(小椋)榮子(西高三三年) コロナ禍生活の始まりと同時に腰痛治療を開始して三年。現在はリハビリ週二回。筋トレ中心です。

坂口勇(西高三三年) コロナ禍で海外出張を控えていましたが、再開。サウジアラビア、タイ、ベトナム、フィリピンへ出かけ、新製品のマーケティングをします。

植村京子(西高三四年) 河内長野市の三曲協会の会長を命じられて三三年。

一〇年後に団体表彰を受け、二三年後には文化の日に個人表彰を受けました。もつと市のために働き、と受け止めています。

川上(川上)恵子(西高三四年) 七〇歳から続けているシニア・カレッジ、国際理解学科、美術学科、健康学科。クラブ活動は、うたごえの会、リズム体操、朗読、美術館めぐりなど元気に楽しく過ごせる日々感謝です。

田中(鈴木)洋子(西高三五年) 西高入学して短歌部に所属、高二の時に生徒会執行部のスミでお手伝いをして夏の甲子園大会に夜行列車で応援に行つたの思い出しました。

橋本勝(西高三五年) 最近、体力の衰えを感じますが、日に三〇分程度ウォーキングに努め、何とか体力維持を心掛けています。



藤枝(岡村)素子(西高三六年) 口は元気ですが、足腰がだんだんと衰えて行動に自信を失いかけています。

常村一則(西高三七年) 仕事を離れ悠悠自適の毎日です。趣味の俳句と月一回のゴルフを楽しんでいます。

有田寛志(西高四一年) 平成二八年三月で私立大学特任教授退職、現在は保護司として社会活動をしています。

藤岡均(西高四二年) まだ仕事を続けております。来年は七五歳になりますができることなら仕事を続けようと思っています。

江阪(米村)詩朗(西高四三年) 犬鳴山の行者が忙しくなりました。というよりも年齢的に上部になり頑張らないと…。

酒澤一喜(西高四五年) 先日、ホームドクターより血糖値が異常に高いとの診断があり、現在治療中です。

田中淳(西高四七年) 鳥取に生まれて一八年。東京と横浜で学生生活八年、就職して鹿児島に一六年。転勤で滋賀に来て二七年になります。四年前に退職して、今は「誰か故郷を思わざる」の心境です。

今井岳史(西高五三年) 長野から高槻市へ転居して二年経ちました。西高の同級生と会う機会も増え、青春の思い出を肴に杯を交わしております。

佐々木宏(西高五三年) 昨夏は古巣の朝日新聞社から依頼され、夏の甲子園(第一〇四回全国高校野球選手権大会)で公式記録員を担当しました。

高垣昭和(西高H九年) 大阪住之江区でパーソナルトレーナーをしています。昨年より母校野球部のトレーニング指導にしております。父高垣義広(四二年卒)が一昨年亡くなりました。

安本喜俊・安本(上田)かおり(西高H一年) 我が家の子供達も高校生、中学生となり、元氣な成長に感謝の日々です。家族でランニングを趣味とし元気に過ごしております。

お悔やみ

連絡頂いた方のみ

谷口(清水)一枝(西高二八年)

松本侃二(西高三七年)

石田正純(西高四一年)

大下(中村)礼子(西高四二年)

谷尾吉郎(西高四六年)

村上悦洋(西高四八年)

田中(田淵)弘子(西高五二年)

お悔やみ申し上げます。

この号は紙面の都合から、年会費納入者のお名前が掲載できませんでした。全員で一一一名の方に納入して頂きました。お礼を申し上げます。

(事務局連絡先)

〒631-0803

奈良市山陵町二六・一

サンブラザ二〇八

村江 信幸 宛

090-3465-7203

